

Who Owns a Tattoo?

あなたの体に彫られた そのタトゥーは誰のもの？

アート タトゥーの図案デザインの無断使用が横行
オーストラリアの画期的な契約が投じた一石とは

オーストラリアで著作権管理を手掛ける非営利団体「コピーライト・エージェンシー」は先頃、権利者の代理として、アート作品を一点物のタトゥーの図案として用いるための利用許諾を発行した。これは同団体にとって、そしておそらくオーストラリア全体でも初めてのケースだ。

利用許諾の対象になったのは、先住民のアートリストであるクリス・ブラックによる2018年の『ジャランジニ』。バッファローの頭部を描いた作品だ。この契約に基づいて、タトゥー彫り師のライアン・パーキンシヨールがアートリスト兼ギャラリート店のケイティ・ヘーゲボルスの腕にバッファローを彫った。

デザインは無断使用が横行するタトゥー業界にあつて、アートリストの知的財産権を尊重する動きは珍しい。オーストラリアのタトゥー業界では、量産型の図案に関してはデザインの利用許諾が取得されているが、一点物のオリジナルデザインのタトゥーの場合は野放し状態だった。利用許諾を取ろうという認識すらなく、平然と図案の無断使用が行われている。

オーストラリアの隣国ニュージーランドでも、タトゥーの図案としてアート作品が無断使用されるケースがしばしば見られる。筆者がニュージーランドのタトゥー彫り師を対象に行った調査によれば、彫り師たちは既存の図案を用いるよう顧客から求められることが多いようだ。

ある彫り師によれば、「アート作品や他人のタトゥーの写真を持ってきて、これを彫

ってほしいと言う顧客が少なくない」。そうした写真の多くは「インターネットにあつたもの」だという。



コピー天国 アート作品や他人のタトゥーと同じように彫ってほしいという客も多い

顧客の中には、インターネットからダウンロードした図案をそのまま彫ってほしいと求める人も多い。このようなケースでは、ビジネス上の実利的な判断によって図案の盗用が行われている。

当然、こうしたコピー行為

には根強い批判もある。一点物のタトゥーの図案を無断使用する行為は、アイデンティティの窃盗にほかならないと指摘する人たちもいる。一点物のタトゥーは、唯一無二の自己表現の形と見なされるからだ。

コピー行為に手を染めた彫り師は、ほかの彫り師から厳しい批判を浴びせられたり、無能だという悪評が立ったりする場合もある。彫り師の世界では、創造性が非常に重ん

じられるのだ。しかしアート界の一部では、権利を持つていることと、その権利を行使することの間に大きな隔たりがある。タトゥー彫り師の間では、図案の無断使用は法律上の問題というより、倫理やマナーの問題と位置付けられる傾向がある。

実際、多くの彫り師は、図案を盗用された場合でも、裁判を起こすことに前向きでない。知的財産権が価値を持つのは「こちらに資金面で余裕があり、相手にダメージを与えるためにわざわざ裁判を行うことをいとわない場合だけだ」と、筆者が話を聞いた彫り師の1人は述べている。

彫り師が法的措置をちらつかせるのは、元サッカークーラーのデービッド・ベッカムのようなセレブの体に彫られた図案が自分の作品の盗用だったときくらいだ。

タトゥーにも著作権が適用されるのは間違いない。だが、タトゥー愛好家が適切な利用許諾の手続きを取るか、図案を盗用された権利者が裁判に訴えるかは、それとは別の問題なのだ。

マリー・ハドリー
(妻) ユニカッセル大准講師(法学)

YES HERMAN-REUTERS